

## 殺鼠剤の使用方法等による環境影響について

平成19年度から26年度に小笠原諸島で実施された、または実施予定であった殺鼠剤処理や環境影響の把握のため実施された土壌等の分析、観察された非標的生物への影響について表 2 - 1 - 1 にまとめた。

### 1. 殺鼠剤の使用方法・量

表に示すように、これらのネズミ防除において使用または使用が予定された殺鼠剤の処理量は、農薬登録情報の用法・用量に定められている 1 回あたり 2～3 kg/ha に比べて約 3～5 倍の量で計画されていた。処理は、粒剤を使用したベイトステーションの設置、粒剤やスローパック剤（粒剤を防水紙でパックしたもの）の手撒き、スローパック剤のヘリコプターによる空中散布で行われた。

### 2. 殺鼠剤の使用による非標的生物への影響

環境への影響に関しては、散布場所の土壌や水の分析を行っているが、いずれも検出限界以下であった。また、目視によるオガサワラノスリやオオコウモリ、オカヤドカリなどに対する直接的な影響（衰弱、死亡など）の観察や植物への影響についての観察も実施しているが、いずれの製剤、処理法でも有害事象は観察されていない（第1回検証委員会資料 2-2-①他）。また、供試数は少なく、短期の観察ではあるが、粒剤やスローパック剤の甲殻類や昆虫類に対する影響も室内試験が実施されており、これらについても、製剤による水質汚濁に起因すると考えられる死亡を除いて、有害事象は観察されていない（第1回検証委員会資料 2-2-③）。

しかし、海水魚類等の殺鼠剤の喫食性や影響については評価されておらず、また、繁殖や食物連鎖などによる間接的な影響については検討されていない。また、「オガサワラノスリの孵化が認められなかった」、「オカヤドカリの数が激減した」等の声もあり、今後、追加の実証試験が必要である。

なお、環境中への有効成分の流出、非標的生物による喫食、水域への流入による水質汚濁等の配慮から、粒剤よりもスローパック剤の使用が望ましく、直接散布よりもベイトステーションの使用による処理が望ましい。ただし、ネズミによる喫食性は低下する可能性がある。

表 2 - 1 - 1 これまでに実施または実施予定であった殺鼠剤処理（ヤソデオン：ダイファシノン 0.005%含有製剤）

実施年度	実施場所	処理方法	処理回数	処理量 (kg/ha)	使用量合計	環境・非標的生物への影響
H19 年度	西島 <sup>*1</sup>	ベイトステーション	消失分 をほぼ 毎日補 充	15 <b>(殺鼠剤消失量:1.6kg/ha)</b>	750kg /49ha	・土壌サンプル（処理前・中）について分析を行ったが、いずれも検出限界以下 ・オカヤドカリが多数殺鼠剤に群がる状況は観察されているが、オカヤドカリも含め、非標的生物に対する直接的な影響は確認されていない
H20 年度	聳島、東島 <sup>*1</sup>	空中散布：スローパック	1 回	11	3,100kg /279ha	非標的生物に対する直接的な影響（衰弱、死亡等）は確認されなかったが、間接的な影響は未検討 海水魚類等の殺鼠剤の喫食性は未評価で、土壌、海水の事前・事後サンプリングは行っていない。
H21 年度	聳島、兄島、弟島 <sup>*1</sup>	空中散布：スローパック	2～4 回	30～50 聳島・鳥島・針之岩:40 弟島・孫島:30 兄島:30-35 西島・瓢箪島・ 人丸島:50 東島・巽島:30	39,210kg /1,696 ha	非標的生物に対する直接的な影響（衰弱、死亡等）は確認されなかったが、間接的な影響は未検討 海水魚類等への喫食性は未評価で、土壌、海水の事前・事後サンプリングは行っていない。
H23 年度	南島 <sup>*1</sup>	ベイトステーション（粒剤）＋ 手撒き（スローパックおよび粒剤）	3 回	・粒剤（ベイトステーション）：28 ・粒剤（手撒き）：19 ・スローパック（手撒き）：33 <b>全体：35.8</b>	1,017.5kg /28 ha	殺鼠剤処理実施前・中・後に、陸水・海水・土壌サンプルについて分析を行ったが、いずれも検出限界以下（海水は実施前・中のみ）
H24 年度 (未実施)	向島、妹島、姪島及び周辺無人島 <sup>*2</sup>	空中散布：スローパック	—	第1回目散布：20 第2～5回散布：10	—	—
H26 年度 (中止)	兄島、瓢箪島、人丸島、西島 <sup>*3</sup>	空中散布：スローパック	—	10×3 回	—	—

\*1：第1回検証委員会資料 2-4 を元を作成

\*2：第1回検証委員会資料 2-2-⑤を元で作成

\*3：第1回検証委員会資料 2-2-⑥を元で作成